

G.R.E.S. インペラトリス・レオポウチネンセ 2017 年

“シンゲー、森から響く叫び”

「インディオは時間的にも空間的にも、一つところに留まっている。現在彼らが製作するのと同じ弓を、彼らの祖先が千年前から製作している。このような面で停滞が見られるのと同様に、集団生活における個人の振る舞いについても変化が見られない。集団の中であって、インディオには安定した静かな居場所がある。インディオはまったくもって自由であり、誰かの求めに応じてそれを充足させるべく行動する必要などない。最大限の社会的安定性、凝集性を保ちつつ、神話的世界にぼつりと存在している。同じ人類で、こうも違うものだろうか！一方は全くもって平静で、一個人の行動は全て自分のものである。他方は、組織化すなわち秩序と平和を維持するための抑圧的なシステムを要するような、変動的社会である。」

(オルランド・ヴィラス・ボアス、セルタオン研究者)

導入

ー今般我らは、単に伝説を取り上げるようなことはしない。我らの想像力を効かせて謎を膨らませるようなこともしない。お前ももう成長したのだ、少年戦士よ、もうクルミン(訳注: トウピ語でいう「ちびっこ」)ではないのだ。トゥカンデyra(毒アリ)の儀式に挑む勇気を持ち、顔に鷹のしるしを持ち、曲がりくねった道でも先を見通すことができる。本日は、真理について話そうではないか。未来になにが待ち受けているかを知るためには、過去を理解しなければならない。

お前が足を地に着けると、心して踏み出すこと。我ら以上にこの大地を愛している者はいないのだと。我らは森の民だ。木々の幹に、私たちの祖先の魂が眠っているのだ。「明日」はひとつひとつの種の中でじっと堪えている。やがて運命の力がそれを運ぶ。鳥がそれを運ぶ。我らの被り物を飾り、我らが放つ矢の行き先を定める鳥が、やがて大きな森を作るのだ。我らもまた森であり、この歌を風に任せることにしよう。良き心をもった人のもとに届くように。彼らには我らの声を聞く必要がある。

そうだ、少年戦士よ、森がなかりせば、我が民はただ記憶の中の存在となり、彼らが「国」と呼ぶものにも希望などひとつもなくなってしまうことだろう、、、

部族の祝祭

ー我らの兄弟が、森の最も遠いところから、カヌーに乗ってやってくる。集落の中央で輪をつくる。身体に色を塗りしが、満月の光に浮かぶ。祭りの夜だ。焚き火のそばで踊ろうではないか。創造主マヴツィニンが、平和と愛を祝うよう命じる。太鼓と笛とマラカスがー晩中鳴り響く。そして夜が明けるころに、我らの魂が目覚める: 美しく、混ざり合い、勇ましい魂、、、まさにブラジルらしい魂として！

我らは生命に謙虚に向き合わなければならない。太陽が熱するところも、月が夜のとばりとともに覆い、明日の驚きを隠すところも、同じ大地である。夢は存在するが、運命をたどるのは我ら自身だ。我らは、自ら植えたものを得るのだ。死は生の一部だ。死は我らの経験の結果だ。死は、我らの存在というものの収穫だ。聖なる木々の幹に我らが祖先の魂がやどるところ、我らはクアルプの祭りで永遠の橋をかけるのだ。そこでは神話が現実となるのだ。我らはこの最後の旅路を大いなる喜びをもって祝う。ただ静かに厳かに去りゆくものこそ珍しいと信じて祝う。その家族、部族の範となすように。人類の一端を担う我らのやりかたに誇りをもって、我らは歌い、踊る。

かつてここは天国だった

—我らはこの大地を大いに愛している。この大地がブラジルと呼ばれる前から。国境などないときから。ただ空と大地があった。視線の届く限りに続く丘と、森と、川と滝、、、自然という子宮に、主神トゥバンが覆いを広げていた。魔法の技によるかのように、湖から聖なる鳥が現れ、カマユラの地を守り、命を芽生えさせた、、、激しく、力強く、震えるように、無限の色合いの中で。雲のような蝶の群れが花々を飾り立てた。イガラペ(小川)には、ピラルク、タンバキ、トゥクナレが棲みついた。集落の辺りでは、クモが糸をつむいで巣をつくり、ホタルがきらめいていた。ブリチャシの木の上には美しい調べが響いていた。小鳥たちの合唱に合わせて、セミが歌っていた。ブジーオ(ホエザル)の低い鳴き声とススアラナ(ピューマ)の唸り声が、我らの目前にある危機を知らせた。近づいてくるのは誰だ？カИАポかカラパロか？アルマジロかアリクイか？これが我が民の暮らし場所である我らの森の様子だった。カライーバ(白人)がここにやってきて、天国だと、彼らの神が彼らを追い出した聖なる園だと考えたのも、無理からぬところだ。

スクリ(ニシキヘビ)の「抱擁」

—自分の天国を失ったもので、カライーバは我らが天国を奪いにやってきたのだ、小さな戦士よ——おそらくは、アニャンガの呪いによって。強欲の風につれて、多くの帆船が我らの浜にやってきた。侵略者たちが、自分でも守りもしない教えを携えて。何も以前と同じではいられなかった。我らを同類とは扱わず、野蛮人と呼び、奴隷にしようとした。旧世界から来て、文明を代表していた。尊大な態度でやってきて、我らの土地と富をかすめとった。金、銀、ダイヤモンド、そして血の色に染める木、大いなる美しさの名残だ。それと交換に持ってきたものといえば、鏡、病気、そして破壊だ。やつらの目指すところは、空に住む神の十字を用い、あちこちにその印を刻みつけ、聖なる言葉を使いながら、我が民を押しつぶされるままにおくことだった。まるでスクリ(ニシキヘビ)がゆっくりと締め付けて殺しにかかってくるように。

美しき怪物たち

—その結果どうなるかなどということをカライーバは気にしていなかった。やつらは自分たちの科学を頼みに、進歩とやらを目指した。森を切り倒し、毒を撒き散らし、小さな世界を見つけてはそこに大きな思い上がりの種を植えた。我らの土地に踏み入り、チェーンソーを振り回し、聖なる幹の

あったところに、貪欲を植えつけた。カライーバは、自分たちの欲を満たすために、より多くのエネルギーを必要とするのだ。やがてやつらは本物の怪物を作り上げた。美しい怪物だ、、、発電所は川を喰らい、魚を殺し、新しい命を枯らし、森を水浸しにし、我が民の未来を泥の中に引きずり込んだ。放ってはおけぬぞ、少年戦士よ、我らの運命を溺れさせておくわけにはいかない。ここが我らの家なのだ！我らは屈するわけにはいかない。我らは、この首飾りの歯のひとつひとつを、同胞ハオニの言葉のひとつひとつを、称えなければならない！

白い長たち

ー公平のために言えば、カライーバの中にも味方となった者たちがいた。ブラジルを偉大な国にしようと荒地を開拓し、耕作地を作り、道を通し、飛行場を作った。この地に「統合」という言葉記した始めての人々だ。彼らは、我らのありように魅かれていた。尊重しあうほどに理解されることはなかったが、警戒しあう必要はなかった。責任感というものが、常に、家族や共同体において尊重されるべき原則だった。我らは、彼ら白き長たちを迎えるべく、我らの様式でクアルプの祭りを行った。それをホンカドールで見たとき、私はまだ若かった。少年戦士だった。その遠征に、私は参加した。彼らもバテロニス（小舟）に乗ってやってきた。尊敬と愛を感じた。主神トゥパンに守られて、我らの心に常に残ることだろう。ヴィラス・ボアス兄弟に栄えあれ。彼らこそが、我らが明日へ向かう道に出会う手助けをしてくれたのだ。

森の叫び

ーシンガーの様々な部族が集まり、インディオであることの誇りを祝う。そして外に向かって語る。カライーバがバランスを取り戻さぬ限り、自然は死に向かい続けるだろう。自然なかりせば、我ら全ての者の母である自然に守られることがなければ、我ら自身の存続も危うくなる——文明社会にあらうと、小さな孤立集落にあらうと、それは変わらない。今やカライーバが謙虚さを発揮し、持続可能性というもののなんたるかをインディオに学ぶべき時である。利潤、進歩、消費、発展といったものを忘れ、人類全体の良心と決意に従い、その存続に充分となるものだけを自然からとりだすこととしなければならない。若き戦士よ、風の翼に乗って飛び、この言葉を北から南まで広めよ。インディオではない人々も知らねばならない。シンガーの叫びを聞くべき時が来たのだと！

調査・編集・文責：カエー・ホドリゲス、マルタ・ケイロス、クラウヂオ・ヴィエイラ

用語集

アニヤング——インディオによると、死後にさまよい、生者を苦しめる霊

バテロニス——浅い川を渡るのに使われる、平底の小舟

ブジオー——ホエザル。別名グアリーバ、バルバードなど

ブリチ——同じ名前の実をつけるヤシ。ビタミン C を豊富に含み、化粧品等に広く用いられる

カライーバ——インディオによる、白人の呼び名

カラパロ——シンゲー保護区に存在する 16 部族のひとつ

カマユラ——シンゲー保護区に存在する 16 部族のひとつ

カイアポ——ブラジル中部に存在するインディオ部族のひとつ

クアルプ——インディオによる死者を称える儀式

マヴツィニン——カマユラの伝説に言う、最初の人類にして創造主

ピラルク、タンバキ、トウクナレ——いずれもアマゾン川流域やブラジル中部に生息する魚類

ハオニ——カイアポ族の首長

ホンカドール——ホンカドール高地。ブラジルの中央、マト・グロッソ州内で、モンチス、アラグアイア、クルエネ、シンゲー等の川に挟まれている

ススアラナ——ピューマ

トウカンデイラ——ヒトを死にいたらしめることもある毒をもつアリ。インディオの子供が青年となる通過儀礼で、幼い戦士はその勇気を示すべく、このアリを多数織り込んだ藁製の手袋に手を入れ、その刺激に 15 分間耐える

トウパン——インディオの伝承に言う主神

参考文献

「ヴィラス・ボアスにとってのシンゲー」—Agência Estado/ Metalivros

「シンゲー保護区の 50 年」—Almanaque Socioambiental

「西への行進——ホンカドール・シンゲー遠征の叙事詩」—Orlando e Cláudio Villas Bôas

「シンゲー、片道の旅路」—Julio Capobianco/ Editora Terceiro Nome

「アマゾナス地域の原住民についての証言集」—José Vicente de Souza Aguiar / Fapeam

「インディオの日記——ウルブ・カアポル」—Darcy Ribeiro/ Companhia das Letras

「アマゾン川で極限まで採集された宝」—Padre João Daniel/ Contraponto

「シンゲーの 55 年、ブラジルが学ぶべきこと」—Renata Valério de Mesquita – Revista Planeta, Edição 519 – Abril 2015

「シンゲーの文化遺産」—Ulisses Capozzoli – Scientific American – no 44 – Edição Especial

サンバ・エンヘード

作：モイゼス・サンチアゴ、アドリアーノ・ガンソ、ジョルジ・ド・フィンジ、アウヂール・セナ、（特別参加：ダヴィ・アサヤギ）

輝いた、、、月明かりの下、羽飾りが！
幹に宿る永遠、、、パジェー（首長）による祈りと魔法！
集落では、笛とマラカスが用いられる
クアルプは祭り、儀式にそった祈り
森には、、、調和、花咲く命
宙を舞う色と歌のシンフォニー
天国は、ここをその居場所と定めた
聖なる楽園を、カライーバ（白人）は発見した
我がブラジルの心臓を血にまみれさせた
美しき怪物が、子供たちから土地を奪い
森を喰らい、川を枯らす
たくさんの富を、貪欲が破壊した

我こそは世界に忘れられた子供
我が色は赤、痛みを表す
我が歌は、勇ましく強くありつつも
平和と愛を象徴する歌
我こそは究極の不死の戦士
真の神であるこの地に属するもの
我こそは第一の種
純粋なブラジルの魂の種

屈せぬ、争わぬ、省みぬ
聞けよ、少年、ハオニの教えを
自由こそ我らが運命
聖なる記憶、生きる理由
誰も通らなかった道をたどり
誰もたどり着かなかったところにいたる
兄弟に対する愛と勇気を思い起こす
去りし守護者、英雄たち
信念と情熱の冒険
国家的統一の夢
カララオー、、、カララオー、、、インヂオは土地を守って戦う
インペラトリスから、彼らのときの声が響く！

栄えあれ、シングーの緑、、、希望
明日へ繋ぐ種、、、遺産
自然の叫び
我らの声が響く、、、保全せよと！